

バスケットボールのジャンプボールに関する一考察

— 創案から1940年代までのルールの変遷 —

大川 信行

A Historical Study on the Jump Ball in Basketball

— Focusing on the Development of the Rules until 1940s —

Nobuyuki OKAWA

E-mail : ohkawa@edu.u-toyama.ac.jp

キーワード：バスケットボール，ジャンプボール，ルール，歴史

keywords : Basketball, Jump Ball, Rules, History

1. はじめに

およそボールを扱うチームゲームの開始方法は、サッカーやバレーボールのように、あらかじめ決められたチームのボール所有から始められることが多い。しかし、ここで取り上げるバスケットボールの場合、それは審判によってトスアップされたボールを相対するプレーヤーが争奪するという方法が採用されている。

ジャンプボールと称されるこの方法は近年、国際バスケットボール連盟 (FIBA : Fédération Internationale de Basketball) によって、重要なルール変更がなされた。それは、2003年より新たに採用された「オルタネイティング・ポジション・ルール」¹⁾との関連で、それまで各ピリオドと延長、それにヘルドボールやダブルファールなどの処置として行われていたジャンプボールを、この年から第1と第3ピリオド、それに各延長戦の開始時とし、次いで2004年9月からは、第1ピリオドの開始時のみとしたのである。

わずかに1試合で1回だけの実施となってしまったのだが、じつは過去においても、これに類似したルール変更が行われていた。それは1937年に、それまで得点後のプレー再開をジャンプボールで始めていたものを、エンドラインからのスローインに変更したのである。これにより、ジャンプボール時の身長による格差は多少なりとも是正され、ゲームのスピード化が図られたとされている。今回の一連のルール変更はこれに次ぐものであり、近い将来、このジャンプボールというプレーそれ自体が消滅する

危惧さえ感じられるのである。

そこで本研究では、創案時から1940年代までのジャンプボールに関するルールがどのように移り変わってきたのかを調査することで、これがどのようなプレー形態で実施され、歴史的にいかに重要なものであったのかを明らかにすることを目的とした。

2. 創案から1904年までのジャンプボール

ジャンプボールは、創案者であるジェームス・ネイスミスがこのゲームを作り上げていく過程のなかで、考え出した方法である。それは、どのようにしてプレーを開始するかという問題で、彼はまず既存のスポーツである水球とラグビーのやり方を思い起こし、これらが粗暴になりやすく不適切であると感じたことから、ジャンプボールの方法を思いついたとしている。

「私は、ゲームの公平な開始方法として、2つのチームの間にボールをトスアップすれば、粗暴さを削除できると感じた。その理由は、各チームから1人のプレーヤーを出して、その間にボールを投げ上げればラフプレーの機会は少なくなるからである。」²⁾

ところが、このジャンプボールがルール上に明記されてくるのは、創案から3年後の1894-95年度からのことで、しかもその前年は、別の方法がルールで規定されていた。

「1. ボールはインプレーの際、以下の方法で行われる。チームは、それぞれの位置に並び、そして、レフェリーがフィールドの真中でボールを投げ上げる。これは、ゲームの開始、セカンドハーフの開始、各ゴールの後、それにファールが起きた時とタイムがコールされた時に行われる。」³⁾

つまり、レフリーが中央でボールを上空に投げ上げ、各チームの何人かのプレイヤーが、それを争奪する形がとられていたのである。また、1893年のルールでジャンプボールは、ヘルドボールの際のプレー再開方法として、「レフリーは笛を吹き、ヘルドボールが起きた地点で、ボールをまっすぐ投げ上げる。」⁴⁾としている。

そして、翌1894-95年度になって、ようやくジャンプボールはプレー開始の方法となっている。ルールに示されたその方法をみると、以下のとおりであった。

「1. レフリーはフィールドの中央でボールを投げ上げることで、ボールをインプレーにする。これは、ゲームの開始、セカンドハーフの開始、各ゴールの後、それに『タイム』がコールされた後のプレー再開の時に行われる。

2. レフリーがボールをインプレーにする時、それはセンターの1人によって、最初触れられなければならない。このルールの違反は、ファールとみなす。」⁵⁾

この規定ではゲーム開始のための方法が、ただ単にボールを「投げ上げる」としか示されておらず、不明瞭な点が残されていたが、それも1895-96年度には、次のように改正されていた。

「セクション1. レフリーは、ボールがフィールドの中央に落ちてくるような方法で、ボールをトスアップし、ボールをインプレーにする。これはゲームの開始、セカンドハーフの開始、それに得点後に行われる。

セクション2. センターで、レフリーがボールをインプレーにした後、最初にボールに触れられるのは、アンパイアによって事前に指名されたセンターの1人でなければならない。このルールの違反はファールとみなす。

セクション3. タイムがコールされた後、レフリーはコールされた場所に近いところにボールが落ちるようにボールをトスアップしてインプレーにする。

セクション4. タイムがコールされた時、その場所に最も近い、相対する2人が最初にタップされたボールに触れ、プレーは再開される。彼らはアンパイアによって、指名される。」⁶⁾

1896-97年度になると、ジャンプボールに必要な技術に関する解説も行われるようになってくる。W. E. アレンが『スポルディング・オフィシャル・バスケットボール・ガイド』のなかで、「センター」と題した論説を掲載したのである。

「1896-97年度のルールに従えば、インプレーの際、ボールはいつも投げ上げられることになる。ボールを得るのに最良と思われる場所の決定は個人に委ねられている。もし、彼が相手よりも身長とジャンプ能力の両方で勝っているとしたら、唯一の疑問はボールを両手でキャッチするか、それとも叩きに行くかのどちらかである。通常はボールを叩いている。・・・

もし、両手でボールをキャッチしたなら、すばやく投げるべきである。握りこぶしはこの方法では通用しないし、相手から離れるために、時々空中で四分の一回転しなければならない。・・・」⁷⁾

1896-97年度のルールでは、「ボールがインプレーとなる時は、いつもボールに最初に触れるプレイヤーは、ボールが落ちる場所から2フィートより遠くに立ってはいけぬ。」⁸⁾と規定している。これは、ジャンパーがより高く飛ぶために助走をつけるようになり、相手との接触が起こり、危険になったからである。

そして、翌1897-98年度にはその具体的な措置として、フロアに半径2フィートのセンターサークルが初めて設置されている(図-1⁹⁾参照のこと)。

また、1901-02年度の『スポルディング・オフィシャル・バスケットボール・ガイド』には、「昨年度のルール解釈」と題した記事が掲載されており、このなかでジャンプボールに関する矛盾点が、以下のような質疑応答の形で指摘されていた。

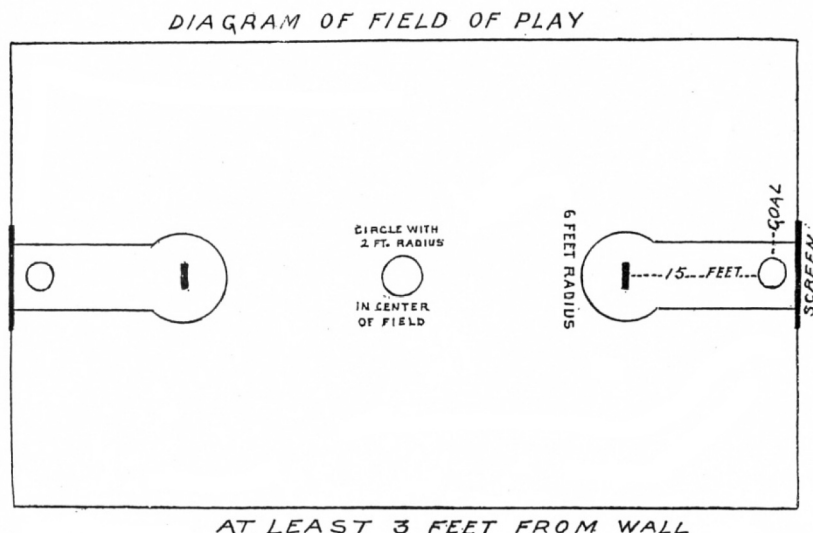


図-1 1897年当時のセンターサークル

「ルール11. セクション26

センター・プレーヤーがジャンプボールの際に、1人がアウト・オブ・バーズへボールをたたいてしまった。その場合はインプレーで相手方のボールとなる。

質問 もし、両方のセンターがボールをたたき、それがアウト・オブ・バーズへ行ったならば、ルールではどのように措置しますか。

答え ボールは戻され、再びセンターで投げ上げられるべきである。委員会はこの状態を想定していませんでした。]¹⁰⁾

ジャンプボールで、両ジャンパーがボールを同時にたたき、そのボールがそのまま誰にも触れられずに、アウト・オブ・バーズになったら、ボールを戻してジャンプボールをやり直すという措置である。また、その他の解釈として、センターはボールが投げ上げられた後にサークル内にとどまる必要がなく、したがって、後方にさがって、相手のセンターがタップしたボールをキャッチすることも可能とされていた¹¹⁾。さらに、投げ上げられたボールの高さに関しても質疑は行われていた。そこでは、「レフリーは、両ジャンパーがジャンプするのに十分な高さまで、ボールを投げ上げるべきである。]¹²⁾ ことが記されていた。これらの新しい解釈は、1901-02年度のルールで規定され、レフリーは以下の手順で、ジャンプボールを行うよう定められていた。

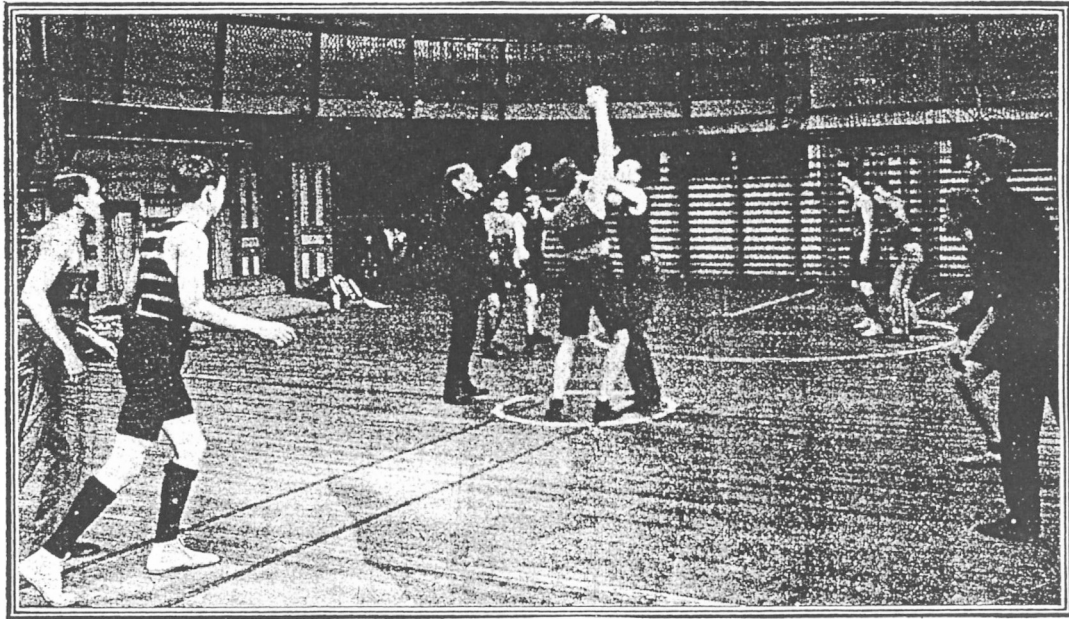
「レフリーは、サイドラインに向かって直角の位

置で、どちらかのセンター・マンがジャンプするよりも高く、そして明確なマークで示されたフィールドの中央近くにボールが落下するようにトスアップすることで、インプレーにすべきである。これはゲームの開始とセカンドハーフの開始、それに各ゴールの後に行われる。]¹³⁾

コート平面図に描かれていたセンターサークルも1903-04年度には、ルールとして条文化され、それとともにジャンパーの立つ位置も明確に規定されてくる。それは、「2人のセンター・マンは、このサークル内に両足を入れた状態で立っていなければならない。]¹⁴⁾ と定められたからである。そして、この年度はジャンプボールからのボールがアウト・オブ・バーズになるケースで、新たな解釈も行われていた。それは1人のセンターがタップし、その後誰もボールに触れずにコートの外に出て、再びボールがコート内に戻ってきた場合である。これは、タップしたセンターが外に出たものとみなされ、その措置は、「アウト・オブ・バーズで相手センターにボールを与える。』としていた¹⁵⁾。

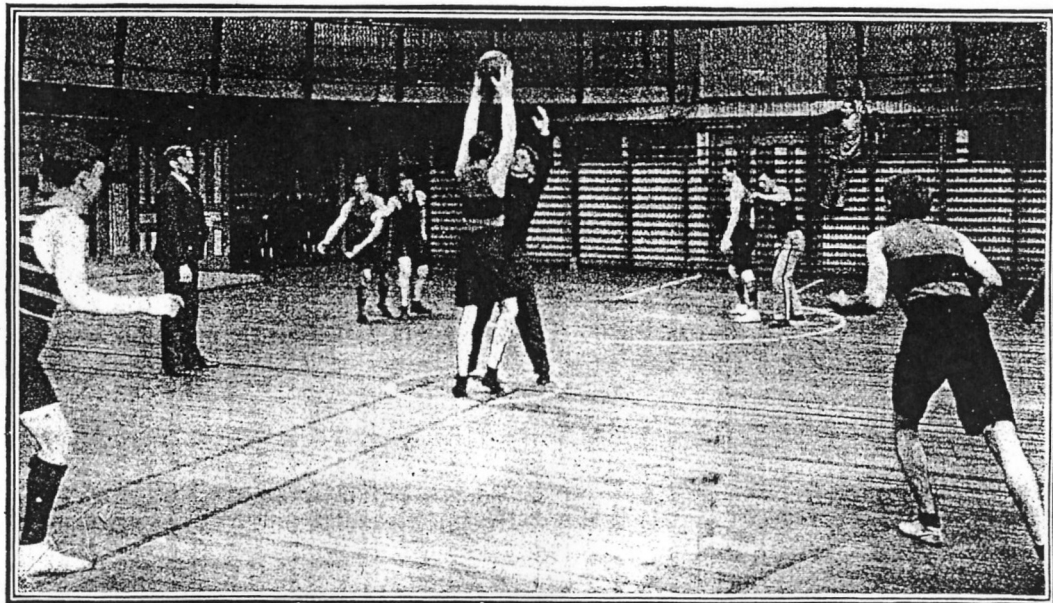
1904-05年度のルールでは、「レフリーは、コート中央でボールをインプレーにする際、彼はボールが最高点に達した時に笛を吹き、その後、ボールは両者もしくはどちらかのセンター・マンによって最初に触れられなければならない。]¹⁶⁾ と規定している。これにより、ジャンプボール時でのレフリーの笛が、プレー開始の合図となったのである。

さて、ここで写真-1と写真-2をご覧ください。



Referee putting the ball in play in the centre.

写真-1 1904年当時のセンタージャンプの様子，レフリーによるボールのインプレー



Centre man catching the ball after the Referee has put it in play.

写真-2 同上，センター・プレーヤーによるボールのキャッチ

これらの写真は、1904年当時に行われていたセンターサークルでのジャンプボールの様子を撮ったものである。写真-1¹⁷⁾は、レフリーがボールをインプレーにするためにトスアップし、最高点に達したところで笛を吹き、両ジャンパーがそれを合図にボールをタップしようとしている、まさにその瞬間である。また、写真-2¹⁸⁾の方は、片方のジャンパーが両手でボールをキャッチしたところをとらえたものである。

ここで注意してもらいたいのはセンターサークルの大きさである。今日のものと比べると、かなり小さいことがわかる。この大きさで両ジャンパーの両足は、サークル内にとどめておかなければならなかったことから、彼らはさほど高いジャンプはできなかったと考えられるし、また、両ジャンパーの間も狭かったことから、ジャンプの際には身体接触も多かったのではなかったかと推察された。

3. 1905年から1934年までのジャンプボール

1905年から1914年まで、男子アマチュア・バスケットボール界には、2つのルール組織が存在し、それぞれ独自にジャンプボールのルールを制定していた。従来からの「AAU・YMCA ルール」では、ルール11、セクション4の規定に従って、レフリーは「選手が即座にコート中央に来ないで試合を遅らせたり、ジャンプボールのジャンプの間、もしくはその前に、サークルの外からステップしてジャンプした場合にファウルを宣告する」¹⁹⁾ ことができたのである。

また、両ジャンパーもしくはどちらかのジャンパーによってボールがアウト・オブ・バウンズにたたかれた場合、ボールは戻され、ジャンプのやり直しとされ、さらにボールはジャンパーによって、たたくこともキャッチするもできたのである²⁰⁾。

一方、独立した「大学ルール」の1905-06年度では、「ジャンプボールで両センターは、自ゴールに対して正面を向き、センターサークル内に両足を入れる」²¹⁾ よう指示されていた。

その後、5年間ほど両者のルールに変更点はみられなかったが、1910-11年度の「AAU・YMCA ルール」では、アウト・オブ・バウンズにたたかれたボールの措置を、コート中央に戻すのではなくて、境界線に出た地点で相手のボールにする規定に変更されていた²²⁾。

さらに、1913-14年度になると、AAUはそれまで認めていたジャンプボールでのボールのキャッチを禁止していた²³⁾。これは同年の『スポルディング・オフィシャル・バスケットボール・ガイド』の「編集者のコメント」によれば、「数年前より、小さなプレーヤーのために変更すべきであるという提案がなされ、長い議論の末、ようやくルール化された」²⁴⁾ ものであった。しかし、この変更では何ら問題の解決にはなっておらず、依然として長身の方が有利であったにもかかわらず、AAUは「すべてのプレーヤーにより多くの等しいチャンスを与えている。」²⁵⁾ と確信していたようである。そしてもう1点、この年の変更としてAAUは、「大学ルール」との整合性を図る目的で、「ジャンパーは、自ゴールに対して正面を向いている」²⁶⁾ ことを規定したのである。

「AAU・YMCA ルール」がこのように、ジャンプボールでの手続きを整備している間、「大学ルー

ル」の方では、ジャンプボールでの粗暴なプレーを減少させるためのルール整備に取り組んでいた。それは、まず第一にジャンプボールの回数を減らすことであり、次いでジャンプそれ自体での接触を避けるルールの制定であった。1913-14年度の『スポルディング・オフィシャル・カレッジイト・バスケットボール・ガイド』の「変更と解釈」には、以下のような説明がなされていた。

「・・・ボールの所有を定めたこのルールは、ボールが外に出る前に、最後に触れたプレーヤーの相手に、アウト・オブ・バウンズのボールを与えることに変更している。これは、それまでジャンプボールとコールされてきた多くを削除するルールであると予想された。

二つめの変更は、ジャンプしてボールに触れるまで、ジャンパーは片手を背中の腰回りに当てておくというジャンパーに対する要求である。確かに、この規則はアベレージ・プレーヤーがジャンプすることができる高さを低くさせることにはなるが、これに、粗暴さが減少すれば、それは小さな問題と考えられた。」²⁷⁾

もし、両者もしくはどちらかのプレーヤーが、片手を背後に回さなかった場合は、ジャンプのやり直しとされたのである²⁸⁾。

翌年、この片手を背後に回さない違反は、ゲームの遅延とみなされて処罰されることになり、加えて、ジャンプボールの際に、「センター・プレーヤーはその両肩のラインをサイドラインに対して直角にしていなければならない」²⁹⁾ ののである。

1915-16年度によろしく、それまで分離していた「AAU・YMCA ルール」と「大学ルール」とが統合されて「合同委員会ルール」となり、このなかでジャンプボールは、「大学ルール」のものがそのまま採用された。つまりアマチュアの競技では、すべてのジャンプボールで、ジャンパーは片手を後ろに回さなければならないのであった。それまで「大学ルール」は、ジャンプの際にボールをキャッチすることを特に禁止してはいなかったが、実際問題として、この片手しか使えないルールでボールをキャッチすることは不可能であった。そのため、新しいルールではこの点を改正して、「ジャンパーの後に、他の誰かがボールに触れるまで、ボールをキャッ

することはできない。』³⁰⁾ ことにしたのである。

ところが、翌1916-17年度になると、このルールはジャンパーの1人によって「タップ」された後、ボールはいわゆる10人のものとなり、解釈としてはタップをしたプレーヤーも、引き続きボールをキャッチすることが認められるようになったのである³¹⁾。

また、それまでのジャンプボール・ルールでは、ジャンパー以外のプレーヤーについての規定は特になかった。そのため、彼らは次第にタップ後のボールを獲得するために、有利なポジションに群がるようになり、そこでかなりの身体接触を起こすようになってきたのである。その対策として講じられたのが、1920-21年度の以下の規定であった。

「4. ジャンパー以外のプレーヤーが、ジャンパーに近過ぎてボールをうまくインプレーにすることが難しいとレフリーが判断したならば、彼は投げ上げられたボールにジャンプする2人のプレーヤーの周りをオープンゾーンとして空ける権限を有する。』³²⁾

片手を後ろに回してのジャンプボールは、1924-25年度をもって廃止され、1925-26年度からは新しいルールとして、もしボールがタップされる前にプレーヤーがサークルから離れると、テクニカル・ファウルとし、さらに新しいセクションとして導入された「ルール15-B」により、ボールが両者間にトスアップされている時に、相手に対して故意に邪魔をすることはパーソナル・ファウルとされたのである³³⁾。

翌年、合同ルール委員会は1つの変更だけを行った。それは、ジャンプする際に、その準備のために置かれるジャンパーの足に、かなりの自由を認めたことである。これは、「センターは、もはやサークルの内部に両足を完全に入れておく必要はなく、そのいずれかがサークルに触れているか、あるいは完全にサークルの内部であれば、それは合法とする。しかし、どちらの足も決して直径のラインに触れることはできない。』³⁴⁾ とされたのである。

1927-28年度のルールから、それまでレフリーが行っていたジャンプボールでの、ボールが頂点に達した時に吹かれていたホイッスルもやめている³⁵⁾。

さらに、1928-29年度に合同ルール委員会は、

「もし、1人のジャンパーが最初のジャンプでボールをタップもしくはキャッチしたなら、彼は次のジャンプでボールに触れることはできない。』³⁶⁾ としたのである。これは、実質的にジャンプボールでジャンパーは、1回しかボールに触れられないことを示したものであるが、このルール変更の背景には、センター・プレーヤーの長身化がかなり進んで、彼らを持てるチームと持てないチームとの格差を是正する必要があったからと思われる。

その後、1929-30年度に委員会は、さらにジャンパーに許されていたボールのキャッチを禁止し、タップした後、そのままボールに触れることも禁止している。

「ボールがサークルの外部に落ちるようにタップされた後、床あるいは他の8人のプレーヤーの誰かによって触れられるまで、どちらのセンターもボールに触れることはできない。』³⁷⁾

ところが、このルールでは厳しすぎたのか、翌年には以下のように、ルールの再改正が行われ、ジャンパーがボールに触れられる回数を現行と同じ2回までとしている。

「どちらのセンターもボールをタップするのは2回までとし、ジャンパー以外の8人のプレーヤーのうちの1人、フロア、バスケット、もしくはバックボードに触れるまで、再びそのボールに触れることはできない。』³⁸⁾

4. 1935年から1940年代までのジャンプボール

1920年代後半から、センター・プレーヤーの大型化がさらに進み、彼らを持てるチームと持てないチームとで大きな格差が生じていたことは、すでに述べたとおりである。1ゲームの得点が30点台であった時代に、このジャンプボールで優位にボールを獲得できることは、そのままゲームの支配にもつながる重要な事柄であった。そのため、タップされたボールを奪い合う際に、不利なチームのプレーヤーは強引で粗暴なプレーになりやすく、1930年代になると、それが問題となっていたのである。また、以前よりシュート成功後のジャンプボールは、一旦ゲームを中断するために、その円滑な進行を妨げるものとして問題視されてもいたのである。

ルール委員会もこうした事態を重くみて調査委員会を設置し、1932年にその報告書を受け取っている。クヌッセンによれば、それは大筋でこれらの問題点を認めていたにもかかわらず、調査委員会の最終報告は、ジャンプボールの存続を支持する内容であったという。

しかし、その後も東部でナット・ホールマンが、西部でジョン・バーンらがこの問題の対策に取り組み、なかでも「パシフィック・コースト・カンファレンス」の「サウザン・デビジョン」は、得点後ただちにエンドラインの外からのスローインでプレーを再開する方法を案出し、その試行の結果を1935年に全米バスケットボール協会に提出していたのである³⁹⁾。

こうした動きに触発されてか、ルール委員会も1935-36年度には、フリースローにおける得点後のプレー再開に限ってではあったが、この新しいエンドラインからの方法を採用している。

「もし、パーソナル・ファウルによるフリースローが成功したなら、スロアーの相手は誰でもコートのエンドラインの境界線外のどこの位置からでもボールをインプレーにすることができる。もし、マルチプル・スローが与えられていたなら、最後のフリースローのみに適用される。」⁴⁰⁾

これに続いて、ルール委員会は通常のフィールドゴールにも同様の方法が採れるかどうかの検討に入り、1937-38年度にその改正を行っていた。

「フィールドからのゴールの後、そのゴールが成功したなら、得点されたチームのプレーヤーはコートのエンドのいかなる境界線外からボールをインプレーすることができる。」⁴¹⁾

これらの改正によって、ジャンプボールは、各ハーフと延長戦の始まり、テクニカル・ファウルとダブル・ファウルのフリースロー後、それにセンターサークル近くで起きたヘルドボールだけとなり⁴²⁾、その機会が大幅に削減されたのである。

また、その後の1940-41年度には、テクニカル・ファウルのフリースロー後に行われていたジャンプボールも廃止され⁴³⁾、これらによって、ゲームのスピード化が図られたばかりか、「ヘルター・スケルター」や「レース・ホース」といったファストブレイクの発展にも寄与したとされている⁴⁴⁾。

ところで、1935年から1940年までの間には、もう1つ重要なルールの改正が行われていた。それは、それまで半径2フィートであったセンターサークルに加えて、半径6フィートのレストランニング・サークル(制限円)が設けられたことである(図-2⁴⁵⁾参照)。これはジャンパー以外のプレーヤーが、

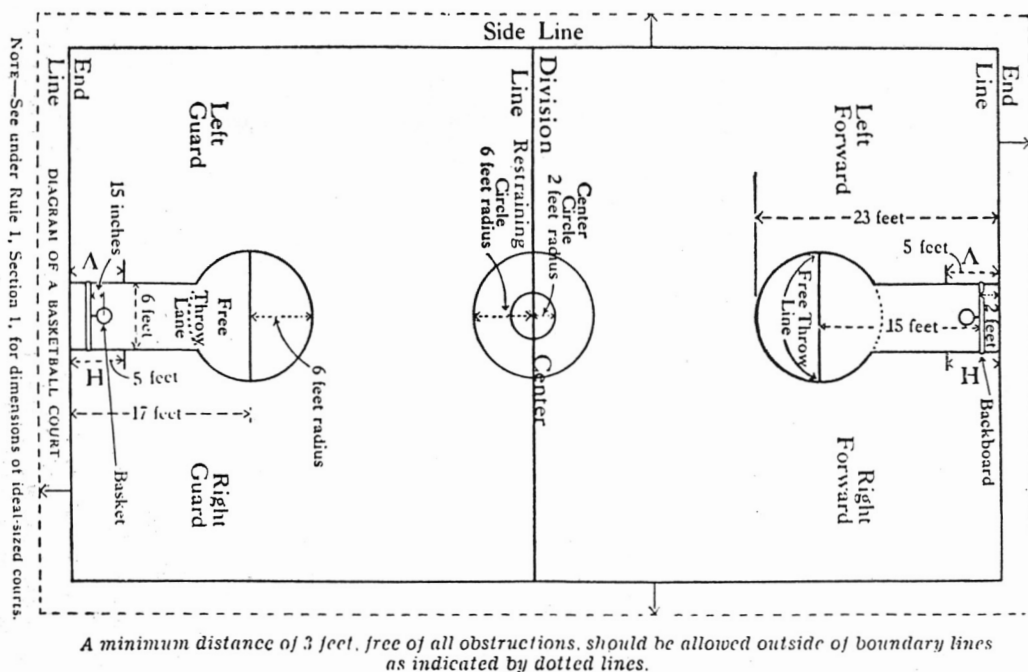


図-2 レストランニング・サークル

タップされたボールを相手よりも先に取りするために、センターサークルに近づいて、身体接触を起こすようになってきたからであった。ルールには、「・・・ジャンパーを除くすべてのプレイヤーは、ボールがタップされるまでレストラニング・サークルの外にとどまっていなければならない」⁴⁶⁾と記されていた。

1940-41年度の改正後、ジャンプボールに関するルール変更はしばらくの間なかったが、1945-46年度になると以下のような改正が行われていた。

「もし、一方のチームがジャンプボールのルールに違反したとしても、その相手が正当にボールをタップしていれば、審判は笛を吹かない。もし、後者がタップしたボールが、そのままゴールに入ったり、彼のチームメイトが最初にボールに触れれば、そのヴァイオレーションは無効となる。もし、プレイヤーがボールのタップ前にジャンプサークルから離れれば、それはヴァイオレーションとなる。」⁴⁷⁾

タップされる前にジャンパーがサークルから離れることは、それまでテクニカル・ファウルであったものが、今回の改正でそれがヴァイオレーション・ファウルの扱いに変えられたのである。

さらに、1947-48年度にはサークルの周りに並ぶプレイヤーのポジションについても規定がされ、「ジャンプボールで、もし相手がポジションのうちの1つを望めば、チームメイトは、ジャンプサークルの周りで、隣接したポジションを占有することはできない」⁴⁸⁾ ことになったのである。

この後、1949-50年度に「ジャンパーの交代」⁴⁹⁾、1955-56年度に「審判の笛の吹き方」⁵⁰⁾、そして1956-57年度と翌年に、「審判の手からボールが離れた時に、ボールがアライブとなる」⁵¹⁾ といった変更が行われていた。

このように1947-48年度以降のルール改定は、どちらかといえば、その手続き上の変更であったことがわかる。したがって、ジャンプボールに関するルール上の整備は、1945-46年度の改正をもって確立されたと考えることができるのであった。

5. おわりに

ジャンプボールは1937年まで、各ピリオドと延長、それにヘルドボールやダブルファールなどのボー

ルの所有が分からない状況に加え、得点後のプレー再開方法としても行われ、その実施数は非常に多かった。したがって、ここでのボールを優位に獲得することは、ゲームの勝敗をも左右する重要な局面となり、ボール獲得のために、これを行うセンター・プレイヤーの大型化が進み、彼らを持たないチームは強引で粗暴なプレーをするようになった。その結果、1937年までにフィールドゴールとフリースローの成功後のプレー再開方法は削除されてしまった。けれども、これによりゲームのスピード化が図られ、「ヘルター・スケルター」や「レース・ホース」といったファストブレイクの発展が促進されたのである。

それ以外のジャンプボールに関するルールの変更をみても、そこにはジャンプのスタイルに関する変更（初期の頃、ジャンパーはボールをキャッチすることができ、また、1913年から1925年までジャンパーは片手を後ろに回してジャンプしなければならなかった）と、ジャンパーとジャンパー以外のプレイヤーの配置に関すること（1936年、レストラニング・サークルの設置）に大別することができ、そのルール上の整備は1945-46年度の改正をもって確立されていたことが判明した。

今日、ジャンプボールは第1ピリオドを始める時だけとなってしまい、その重要性は大きく失われてしまっているが、以上のようにバスケットボールの歴史からみると、このジャンプボールは創案時から連続と続けられてきた大事なプレーの一つであったことがわかる。

<注および引用・参考文献>

- 1) それまで各ピリオドと延長、それにヘルドボールなど、ボールの所有が分からない場面（ジャンプボール・シチュエーション）では、ジャンプボールを行ってゲームを再開していたが、新ルールでは第1ピリオドの開始時を除き、ジャンプボール・シチュエーションでは、両チームが交互にスローインすることでゲームを再開することになった。
- 2) Naismith, James. *Basketball: Its Origin and Development*, New York: Association Press, 1941, p.50-51.
- 3) Naismith, James. *Basket Ball Rules for 1893*, Springfield, Mass.: The Triangle Publishing

- Co., 1893, p.15.
- 4) Ibid., pp.15-16.
- 5) Official Rules and Score Blanks for Basket Ball, New York: The International Committee of Young Men's Christian Associations, 1894, p.9.
- 6) Official Rules and Score Blanks for Basket Ball, New York: The International Committee of Young Men's Christian Associations, 1895, p.7.
- 7) Allen, W. E. "The Center," Spalding's Official Basket Ball Guide, (ed.). Luther Gulick. New York: American Sports Publishing Company, 1896, p.17.
- 8) Ibid., p.40.
- 9) Gulick, Luther. (ed.). Spalding's Official Basket Ball Guide, New York: American Sports Publishing Company, 1897, p.4.
- 10) Hepbron, Geo. T. (ed.). Spalding's Official Basket Ball Guide, New York: American Sports Publishing Company, 1901, p.57.
- 11) Ibid., p.79.
- 12) Ibid., p.85-87.
- 13) Ibid., p.131.
- 14) Hepbron, George T. (ed.). Spalding's Official Basket Ball Guide, New York: American Sports Publishing Company, 1903, p.79.
- 15) Ibid., p.135-137.
- 16) Hepbron, George T. (ed.). Spalding's Official Basket Ball Guide, New York: American Sports Publishing Company, 1904, p.82.
- 17) Hepbron, George T. (ed.). How to Play Basket Ball. New York: American Sports Publishing Company, 1904. p.12.
- 18) Ibid., p.14.
- 19) Hepbron, George T. (ed.). Spalding's Official Basket Ball Guide, New York: American Sports Publishing Company, 1905, p.102.
- 20) Ibid., p.102-103.
- 21) Fisher, Harry A. (ed.). Spalding's Official Collegiate Basket Ball Guide, New York: American Sports Publishing Company, 1905, p.85.
- 22) Hepbron, Geo. T. (ed.). Spalding's Official Basket Ball Guide, New York: American Sports Publishing Company, 1911, p.167.
- 23) Hepbron, Geo. T. (ed.). Spalding's Official Basket Ball Guide, New York: American Sports Publishing Company, 1913, p.135.
- 24) Ibid., p.7.
- 25) Ibid., p.9.
- 26) Ibid., p.134.
- 27) Fisher, Harry A. (ed.). Spalding's Official Collegiate Basket Ball Guide, New York: American Sports Publishing Company, 1913, p.155-156.
- 28) Ibid., p.174.
- 29) Fisher, Harry A. (ed.). Spalding's Official Collegiate Basket Ball Guide, New York: American Sports Publishing Company, 1914, p.30.
- 30) Ball, William H., George T. Hepbron and Oswald Tower, (eds.). Spalding's Official Basket Ball Guide, New York: American Sports Publishing Company, 1915, p.28.
- 31) Hepbron, George T., Oswald Tower and William H. Ball (eds.). Spalding's Official Basket Ball Guide, New York: American Sports Publishing Company, 1916, p.18.
- 32) Tower, Oswald. (ed.). Spalding's Official Basket Ball Guide, New York: American Sports Publishing Company, 1920, p.3.
- 33) Tower, Oswald. (ed.). Spalding's Official Basket Ball Guide, New York: American Sports Publishing Company, 1925, p.ii.
- 34) Tower, Oswald. (ed.). Spalding's Official Basket Ball Guide, New York: American Sports Publishing Company, 1926, p.ii.
- 35) Tower, Oswald. (ed.). Spalding's Official Basket Ball Guide, New York: American Sports Publishing Company, 1927, p.13-14.
- 36) Tower, Oswald. (ed.). Spalding's Official Basket Ball Guide, New York: American Sports Publishing Company, 1928, p.11.
- 37) Tower, Oswald. (ed.). Spalding's Official Basket Ball Guide, New York: American Sports Publishing Company, 1929, p.14.
- 38) Tower, Oswald. (ed.). Spalding's Official

- Basket Ball Guide, New York: American Sports Publishing Company, 1930, p.14.
- 39) Knudson, Thomas A. “The Evolution of Men’s Amateur Basketball Rules and the Effect upon the Game,” Unpublished Doctor’s dissertation, Springfield College, 1972, p.465-466.
- 40) Tower, Oswald. (ed.). Spalding’s Official Basket Ball Guide, New York: American Sports Publishing Company, 1936, p.22.
- 41) Tower, Oswald. (ed.). Spalding’s Official Basket Ball Guide, New York: American Sports Publishing Company, 1937, p.17.
- 42) Ibid., p.15.
- 43) Tower, Oswald. (ed.). Spalding’s Official Basket Ball Guide, New York: American Sports Publishing Company, 1940, p.15.
- 44) Knudson, Thomas A. op. cit., p.471.
- 45) Tower, Oswald. (ed.). Spalding’s Official Basket Ball Guide, op. cit., 1936, p.2.
- 46) Ibid., p.16.
- 47) Tower, Oswald. (ed.). The Official Basketball Guide, New York: A. S. Barnes and Co., 1945, p.171.
- 48) Tower, Oswald. (ed.). The Official Basketball Guide, New York: A. S. Barnes and Co., 1947, p.3.
- 49) Tower, Oswald. (ed.). The Official Basketball Guide, New York: A. S. Barnes and Co., 1949, p.2.
- 50) Tower, Oswald. (ed.). The Official NCAA Basketball Guide, New York: National Collegiate Athletic Association, 1955, p.18.
- 51) Tower, Oswald. (ed.). The Official NCAA Basketball Guide, New York: National Collegiate Athletic Association, 1956, p.2.

(2008年10月20日受付)

(2009年1月21日受理)